

## 「文字を愛でる」展によせて

## 仏教經典における文字

## — 金字經にみる「經典即仏」の思想 —

「文字を愛でる」展では、当館の書跡コレクションの中から、經典・文学・手紙の分野を中心に、そこに描かれる文字に注目します。本稿では、その中の仏教經典にみる文字について考えてみたいと思います。

奈良時代、平城京遷都によって次々と寺院が移築・建立され、仏堂や仏像が数多く制作されるのに伴い、官営の写経所が整備されて、写経が国家的に行われるようになりました。こうした官営写経所では、書生(写経する人)、校生(校正する人)、題師(表紙の外題を書く人)、界生(料紙の罫線を引く人)、装演師(紙継ぎや表装をする人)などの分業制がとられます。書写された写経は、何度も校正が行われ、誤字や脱字があると報酬が減らされるという厳しい制度のもと、写経が行われました。それゆえ、奈良時代の經典の文字は、端正で誤字が少ないのが特徴となっています。当館双柏文庫の写経切(図1)も、こうした奈良時代写経の様相をうかがうことができる作品です。經典は「仏の教え」であり、これを正しく広め伝えるために、誤りが許されない正確さが要求されたのです。

写経の中には紫紙や紺紙に金泥によって書写したのが見られます。いわゆる紫紙(紺紙)金泥經と呼ばれるものです。日本では奈良時代以降、紺紙や紫紙に金泥(あるいは銀泥)を用いて書写する金字写経が制作され、特に平安時代には法華經を中心に数多く書写されました。本展でも、法華經卷第七妙音菩薩品第二十四の断簡を展示しています(図2)。こうした写経は金字で書写され、さらに猪牙で字を磨く(磨く)という工程を経て、文字が金色の光沢を放つようになります。これは単に金色という豪華さや美しさという装飾性を意図したものだけではなく、「文字が金色の光を放つ」という点に特別な意味を持たせていると考えられています。

金泥經の金字は、通常金粉を膠で溶いた金泥を用いることが多いのですが、近年の光学調査により、慈光經(慈光寺藏)や久能寺經(鉄舟寺・東京国立博物館藏)、扇面法華經冊子(四天王寺藏)といった平安時代を代表する装飾經の經文や界線の金色部分に、真鍮泥が使用されていることが明らかにされ話題となっています。真鍮は銅と

亜鉛の合金で、現在ではさほど高価な金属のイメージはありませんが、かつては「鍮石」や「黄銅」とも称されて金に匹敵する価値のある金属として認識されていました。

このうち扇面法華經冊子(図3)では、料紙や下絵の切箔に通常の金箔を用いている一方で、經文の金字部分や外題の題字には真鍮泥を用いており(図4)、同じ金色でも装飾と文字とでは明確に素材を変えていることがわかっています。この理由についてはまだ明確にはなっていませんが、經文に真鍮泥を用いることは、明らかに下絵に用いる金とは別の「金」という意識が働いているように思います。

これを考えるうえで興味深い作例が、四天王寺に伝来する阿弥陀三尊像の中尊・阿弥陀如来立像(室町時代)(図5)です。この阿弥陀如来は、聖徳太子護持仏との伝承とともに「閻浮檀金弥陀」と称されて、同寺什物の中でも特に大切にされてきた仏像です。「閻浮檀金」とは、仏教世界の閻浮提に流れる川の底で産出される金とされ、仏が放つ光を「閻浮檀金の色のごとし」と称するほど特別な金として認識されていました。近年この「閻浮檀金弥陀」を蛍光X線調査で調べたところ真鍮製であることがわかったのです。まだ確かなことは言えませんが、こうした例から、真鍮は仏教における特別な金属、特に「閻浮檀金」の輝きを表現する金属として採用されたのではないかと筆者は想像しています。装飾經、なかでも久能寺經や扇面法華經冊子といった一級の作例におい

て、經文の文字に真鍮泥が用いられるのも、仏の光を象徴する「閻浮檀金」の輝きを期待したのではないかとと思われるのです。

中国・唐時代の「法華伝記」卷第八には「于時空中忽在異光。照吾頂。王檢始末。知是法華經方便品初行終一字。取水令写。故文字現仏身来助。問此誰光。答我是方便品文字。法華文字。一一皆是仏也。此男婦我故来救。」との記述がみられます。これは、法華經の方便品を書写していたところ、突如經文が光を放ち、そして經文自身が「經の文字一つ一つが仏であり、救済のために化現したのだ」と告げたという逸話です。ここには、經典に書かれる文字それぞれが仏であり、それゆえ文字が金色の光を放ったことを記しています。金泥あるいは真鍮泥を用いた金字經には、經文の文字そのものが仏であるという「經典即仏」の信仰をうかがうことができるのです。

こうした經文を仏としてとらえる思想は、法華經への信仰の高まりとともに、經文の一文字一文字を一仏と見立てる法華經へと結実します。当館の「一字蓮台法華經」は、美しい見返し絵とともに、經文の一文字ごとに金の円輪と蓮台が描きこまれており、まさに一字一仏の思想を表現する象徴的な作品といえるでしょう。本展を通して、「仏」である仏教經典の文字にも注目していただければ幸いです。(一本崇之)

※図3・4：四天王寺提供

図5：筆者撮影



図5 阿弥陀如来立像(閻浮檀金弥陀)



図4 同部分



図3 扇面法華經冊子 法華經卷第一

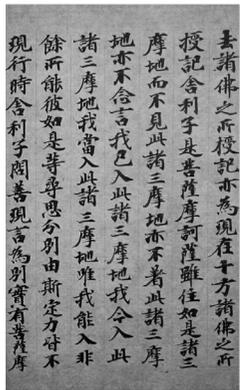


図1 写経切



図2 紫紙金字經切